

## 横浜市地区センターのフリースペースの利用実態に関する研究

### サードプレイスの概念からみる行為と空間に着目して

日大生産工 (院) ○長谷川 翔大

日大生産工 古田 莉香子  
広田 直行

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

サードプレイスの概念は個人的・文化的側面によって異なると考えられる。今後の居場所づくりにおいてサードプレイスは重要な役割を担うと考えられる。そこで本研究では、再定義したサードプレイスの概念 (Fig. 1) をもとに利用者の属性と行為が限定されない空間をフリースペース (以下F.S) とし、利用者の行為を音の視点から考察する。そのうえで、利用行為に起因する空間構成要素を明らかにし、居場所形成の指針となる基礎的指標を明らかにすることを目的とする。

1. 自宅, 学校, 職場に属さない公共空間
2. 無予約かつ無料で利用できる
3. 地域に開かれていてアクセスしやすい
4. 利用者の誰もが使える居場所
5. 会話, 娯楽等の交流利用(コミュニティ型)
6. 読書, 勉強等の個人利用(マイプレイス型)

Fig. 1 再定義したサードプレイスの概念

### 1.2 研究対象

横浜市地区センターのF.Sを対象とする。高齢者施設との複合事例を除く各区の入館者数の最も多い施設のうち、本稿では調査を行った4施設を対象とする (Table1)。

Table1 施設概要

事例	施設名称	所在地	延床面積 (m <sup>2</sup> )	複合相手
1	中屋敷	瀬谷区	1,749	ケアプラザ
2	踊場	戸塚区	1,775	—
3	菊名	港北区	1,083	図書館
4	仲町台	都筑区	2,317	—

### 1.3 研究の方法

事前調査として、各空間の面積や什器などの設えを把握し利用行為の分類と定義付けを行う。本調査では、平日9時から17時までの計8時間を対象に30分に1度の巡回プロット調査と等価騒音レベルの計測を行う。利用者の数と行為を目視で判断し、平面図への記入を行い、座席が集約している空間の中央部で等価騒音レベルを計測する。そのうえで各空間における行為と音環境に寄与すると考えられる面積, 位置, 囲み度, 什器の4つの構成要素の関係を分析する。

## 2. 面積と音の関係

各空間の面積と音の関係グラフを以下に示す (Table1, Fig. 2)。施設別にみると、図書コーナーを除く各空間では面積が大きい空間ほど賑わいの傾向がみられ、ロビーや娯楽コーナーが賑わいのある空間となっている傾向が伺える。続いて、室空間ごとに面積と音の関係をみる。ロビーは4-①の仲町台が最も大きい面積を有しており、それに比例して等価騒音レベルが高く、賑わいのある様子が伺える。娯楽コーナーは3-②の菊名が最も大きい面積を有しており、仲町台と同様に賑わいのある空間であることが伺える。図書コーナーと学習室に関してはいずれの施設でも面積と音にあまり大きな差異はみられない。以上のことから施設内における異なる空間、そして室名称の同じ空間であっても面積に比例し、行為の賑わいが創出されていることがわかる。しかし、いずれの施設においても図書コーナー

は面積に比例せず静観さを保っている。要因として図書コーナーは空間の半分以上を書架が占めており、動線部や隣接空間等のから座席まで一定の距離が保たれていることが考えられる。これらの推察から行為と空間の関係を分析するうえで、什器や空間の位置に着目した考察が必要であるといえる。

Table2 面積表

		①ロビー	②娯楽	③学習	④図書	面積(m <sup>2</sup> )
1	中屋敷	36.1	34.8	33.8	63.9	168.6
2	踊場	46.0	35.8	29.4	71.9	183.1
3	菊名	35.0	54.2	—	—	89.2
4	仲町台	72.0	40.7	28.5	69.5	210.7

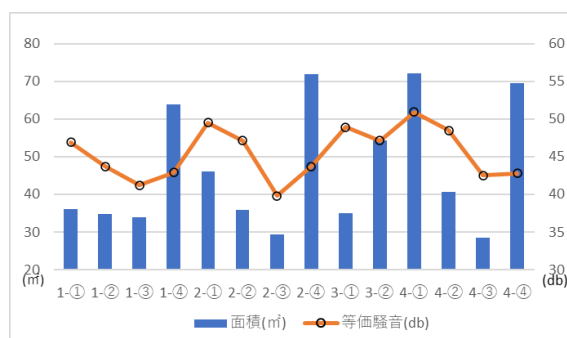


Fig. 2 面積と賑わいの関係図

### 3. 空間の位置と音の関係

#### 3.1 施設別にみる空間の位置と音の関係

中屋敷地区センターは1階に地域ケアプラザと体育室を設けており、2階が地区センターの主な機能で構成されている館である。ロビーは受付から可視可能であり、動線部に接続した形態であるためロビー利用者だけでなく歩行者の会話などもみられる空間となっている。また、プレイルームに隣接していることや比較的近い位置に音楽室が位置していることが賑わいを創出している要因であると考えられる。娯楽コーナーは図書コーナーと同程度の賑わいをみせている。動線部から座席面までの距離がお互いに同程度であることが要因であると考えられる。学習室は中屋敷の中

で最も落ち着いた空間になっている。4つのフリースペースのなかで、最も受付から距離を有する空間であり、施設の末端近くに位置していることが静かな空間を創出している。踊場地区センターのロビー空間はエントランスホールに隣接した形態となっている。そのため、外気や受付の作業音など周囲の音環境が鮮明に響いてくる。フリースペースのなかで最も賑わいのある空間となっている。娯楽コーナーはエントランスホールを通過して直進した空間に位置している。ロビーと同様に受付からの視線や距離を直に感じられる空間であるため、賑わいのある空間になっている。学習室は中屋敷と同様に施設の末端部に位置している。そのため他のF.Sよりも静かな空間となっており、騒音レベルも中屋敷のものと同程度となっている。図書コーナーはロビーに隣接した位置となっている。ロビーや受付からの音が響くときもあるが、基本的には落ち着いた空間になっている。菊名地区センターは図書館と複合化された施設の3階に存在する。3階の入り口から直ぐの位置に受付があり、受付の前部にロビーが位置している。ロビーは受付の前部であるため、職員と利用者の会話が聞こえやすい。また、ロビーから斜め前にプレイルームがあり、そのプレイルームに隣接する形でレクリエーションルームが配置されている。そのため、動的な空間からの音環境が影響していると考えられ賑やかな空間になっている。娯楽コーナーもロビーと同様、賑やかな空間となっている。仲町台地区センターはエントランスに接続する形でロビーを設けている更にはロビーは吹き抜けになっているため、2階の娯楽コーナーや体育室での活動が反響して、ロビーの賑やかな空間を創出しているといえる。娯楽コーナーは仲町台のF.Sのなかで唯一、2階に位置する空間である。体育室が利用可能な際はスポーツ活動の賑やかな音が漏れ出している。1階のロビ

一同様、吹き抜けとなっているため他の空間の音の影響を受けやすい。

### 3.2 室名称からみる空間の位置と音の関係

ロビーはエントランスまたは受付の近くに位置するものが多く、踊場、菊名、仲町台が賑やかな空間となっている。娯楽コーナーは施設によって音の違いがみられる。特に、会話や娯楽などを主目的に利用する場合は賑やかな空間となる。図書コーナーは動線から作業面まで一定の距離が保たれており、学習室は施設内の末端部に配置される傾向がみられる。以上から、受付やエントランスに隣接する空間は動線の都合上、音が響きやすく賑やかな空間となり、受付やエントランスからの距離が遠い空間ほど、静寂な空間になりやすい傾向がみられる。

### 4. 空間の囲み度と音の関係

騒音レベルと空間の囲み具合を分析する。各空間の壁で構成されている部分の長さと開かれている部分の長さの比率計算から考察する。この際、直射日光が入らず、かつパーテーション等で外部を視認することのできない開口部は壁として扱うものとし、本棚等、人の身長と同程度またはそれ以上の高さの什器がある場合は壁とみなした (Fig. 4)。中屋敷は学習室、娯楽コーナー、図書コーナー、ロビーの順で囲み度が高い。学習室は最も等価騒音レベルが低く、囲み度が最も低いロビーは等価騒音レベルが高い。踊場は中屋敷と同様にロビー、娯楽コーナー、図書コーナー、学習室の順で騒音レベルが高い。学習室はいずれも室分化された空間であり、個人利用かつ静的利用の傾向が大きい。また、図書コーナーは目線レベルの書架に囲まれた空間となっており動線部から座席における利用者と行為は見えづらい形態である。娯楽コーナーやロビーはいずれも開放型の形態であり個人利用だけでなく複数人による会話や娯楽などの動的

な行為がみられる。また、囲われ度の高い空間は外部との視線の繋がりや自然採光が可能である開口部の有無にかかわらず静的利用が行われている。外部との視線や音が遮断されており、静寂さが保たれやすいと考えられる。

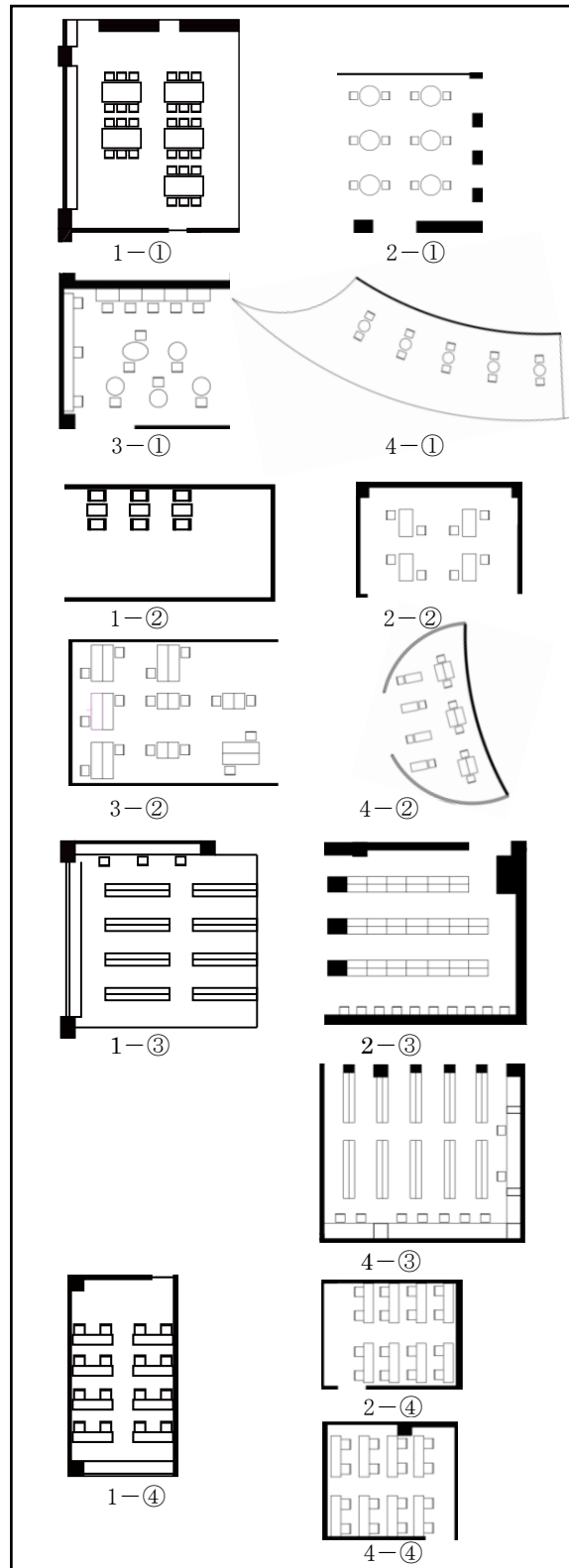


Fig. 4 囲み度と面積の比較図

## 5. まとめ

本稿では巡回プロット調査と等価騒音レベルの測定を行った。そのなかで利用行為には音の大きさが密接にかかわっていると考えたため、音環境に寄与する空間の構成要素の特定を利用実態から明らかにした。以下に調査より得られた各空間の特徴をまとめる (Fig. 3)。面積をみると、図書室を除いて多くの空間が面積に比例して音が大きくなる傾向がみられる。空間の位置の考察ではエントランスや受付に近いほど騒がしい空間になりやすく、遠いほど静寂な空間になりやすい傾向がみられた。囲み度の分析では、いずれの施設も学習室は室分化された空間であるため、最も囲み度が高く読書や勉強などの静的行為が多くを占めている。ロビーはいずれも囲み度が低く建物の入り口に近いフリースペースはオープンになりやすく騒然とした空間になりやすいといえる。以上のことを音の視点からまとめると、室空間の面積、位置、囲み度は、空間の特性を決める重要な構成要素であるといえる。

今回は利用行為に寄与する空間の構成要素を明らかにした。今後は什器の種類や配置方法に着目して考察を行い、利用行為を促す設えの項目を明らかにしていきたい。

### 【参考文献】

- 1) 文化施設等の利用状況  
地区センター市民局区政支援部地域施設課
- 2) 横浜市地区センター指定管理業務特記仕様書(施設概要)
- 3) 横浜市地区センターhp
- 4) 「サードプレイスコミュニティの核になるとびきり居心地よい場所」 レイオールデンバーク みすず書房
- 5) 座席選択行動に基づく店舗内行為と空間要素の関連性—行動観察調査からみたカフェのサードプレイス利用分析—その2—日本建築学会計画系論文集第82巻第731号 p. 41-48 2017年1月 森記念財団都市整備研究所 早稲田大学人間総合研究センター-丹波由佳理

### 【注】

注1) サードプレイスのサードプレイスの概念からみる地域コミュニティ施設の空間構成に関する研究—横浜市地区センターの無料利用可能空間と多目的行為に着目して—にて Fig. 1 のサードプレイスの概念の再定義を行った。

Table3 フリースペースの構成要素

事例	形態		位置		受付視線		座席配置			縦空間		空間分節		開口部		仕上げ材 床	等価騒音レベル (db)
	動線	滞留	入口	分散	あり	なし	中央	壁沿	コーナー	1層	吹抜	あり	なし	あり	なし		
1-①		○		○	○		○			○			○	○		タイル	46.9
1-②		○		○		○		○		○			○	○		タイル	43.7
1-③		○		○		○	○			○		○		○		カーペット	41.9
1-④		○		○	○			○		○			○	○		タイル	43.2
2-①	○		○		○		○			○			○	○		カーペット	49.5
2-②		○		○	○		○				○		○	○		カーペット	47.1
2-③		○		○		○	○			○		○		○		カーペット	39.8
2-④		○		○		○		○		○			○	○		カーペット	43.7
3-①		○	○		○		○	○		○			○	○		タイル	49.9
3-②		○		○		○	○			○			○	○		フローリング	51.1
4-①	○		○		○		○				○		○	○		タイル	50.9
4-②		○		○		○	○				○		○	○		タイル	49.5
4-③		○		○		○	○			○		○		○		カーペット	43.5
4-④		○		○		○			○	○			○	○		カーペット	42.8